

北海道サケネットワーク 会報

2007年4月 創刊号

北海道サケネットワーク会報の
創刊にあたって

水産総合研究センターさけます
センターの紹介

札幌市豊平川さけ科学館

北海道大学北方生物圏フィールド
科学センター上田研究室

札幌市環境局みどりの推進部

大雪と石狩の自然を守る会プロフィール

北海道サーモン協会

(財) 日本釣振興北海道地区支部

安平町マチおこし研究



桜井淳史「サケ—母なる川に帰る」より



脂鰭（あぶらびれ）

サケ科魚類の身体的特徴の一つに、背鰭の後方にみられる肉質の脂鰭がある。絵や像になっているサケには必ずと言っていいほどこの脂鰭がついている。上の図の右側は典型的なアメリカ北西部のインディアンのサケの文様で、立派な脂鰭が描かれている。シアトルやバンクーバーを訪れるたびに、土産物屋から美術商の店頭まで、さまざまな所でこのような文様を目にしてきた。しかし、これまで、北海道でアイヌ民族の伝統的な文様にサケがどのように描かれているか見る機会がなかった。ごく最近、それを創刊号が出されたさけますセンター発行の「SALMON 情報」誌の表紙で見ることができた(上図左側)。

二つの文様に見られる脂鰭には大きな違いがある。アイヌ民族の文様では小さく描かれているのが、アメリカ北西部のインディアンの文様では大きく目立つよう描かれている。こうやって並べてみると、繁殖期のサケの雌雄の脂鰭（雄の方が大きい）を比べているような気がする。アイヌ民族は雌を意識してサケを文様化し、イクラを食べないアメリカ北西部のインディアンは雄をモデルにしたのであろうか。

脂鰭は英語で adipose fin と言うが、確かに脂肪が多い部分である。放流時の稚魚では、しばしば脂鰭が切除されるので、それから DNA を抽出しようとしたことがあったが、脂肪が邪魔になって苦労させられたことがある。なお、脂鰭の役割はよく分かっていない。

北海道サケネットワーク会報の創刊にあたって

北海道サケネットワーク

代表 浦野明央（北海道大学・理学研究院）

昨年（2006年）11月18日にライフオート札幌において本会の設立総会が開催され、正式に一つの団体としての活動が始まりました。設立総会に至るまでには、現在、事務局長を務めておられる木村義一氏のなみなみならぬ御尽力がありましたし、会の活動を軌道にのせていくにあたって、これからはばらくの間、御奮闘に頼るところが大きいと存じます。

本会の理念は、サケと人との関わりを考え、サケをシンボルとして『豊かなふるさと』を守り伝えるために活動する市民運動の連携および継続的な発展を図る、というところにあります。この理念を現実の活動に反映するためには、本会に参画しているそれぞれの団体の間での情報交換がたいへん重要です。そのため、当面は本会の活動を、情報交換を主軸としたものとして、ネットワークの充実を目指し、会の土台を作る必要があります。

具体的な活動としてすでに走り始めているものにメーリングリスト（略称“ML”）があります。インターネットに接続できる環境にあれば、MLの利用は簡単なのですが、まだ登録メンバーが12と少なく、十分に情報交換するための媒体となっていません。参加はごく簡単で、御自身のID、パスワード、メールアドレスをサケネットのリストに加えてもらうだけです。情報交換を

活発にし、本会の活動を軌道に乗せるためにまだ登録されていない会員の方には、なるべく早く参加していただきたいと願っています。

MLとともに重要だと位置づけている情報交換活動が、会報の発行（年1～2回）です。会報に掲載する内容として、投稿原稿およびMLの摘要を考えています。さらに、それぞれの会員団体の会報、あるいは企業のニュースや案内の記事でこれぞと言うものについて、転載を許していただけるのなら、それらも提供していただき掲載していくのがいいのではないかと考えています。それによって、道内の各地で行われているさまざまな自然を守ることにつながる活動を知ることができると思っています。

北海道サケネットワークの大切な役割の一つは、それぞれの地域で起きている出来事なるべく多くの人々が共有することです。だからと言って、そのための情報交換活動が負担になっては、本会の存続すら危うくなってきます。MLの利用によって、そのような負担を避けて、気軽にそれぞれの会員の日常的な活動を他の会員団体、さらにはその構成員に知らせることが可能です。そういった日常の活発な情報交換という土台を通して、相互理解を深めるとともに、中味の濃い会報を作れるようにしていきたいと考えています。

水産総合研究センターさけますセンターの紹介

さけますセンターは、さけます資源の安定的な供給、漁業の発展および国際的な資源管理責務への対応等を通じて本邦系さけます資源の適正な管理に資するため、さけます類のふ化放流、生物モニタリング調査、研究開発を総合的に推進し、その成果を広く普及しているさけますの専門機関です。

その組織は、我が国の水産に関する総合的な研究開発機関である独立行政法人水産総合研究センターの一員であり、札幌市に在る本所と北海道内各地の15事業所で構成されています。本所には管理部門と研究開発部門が置かれています。事業所は徳志別川、千歳川、西別川、十勝川、遊楽部川などに設置され、ふ化放流、生物モニタリング調査等の実施部門として機能しています。

さけますセンターは、1888年(明治21年)に石狩川水系千歳川に設置された官営の千歳中央孵化場(現在のさけますセンター千歳事業所)に始まります。その後、時代とともに形を変え、水産庁北海道さけ・ますふ化場、さけ・ます資源管理センター、独立行政法人化を経て、平成18年に(独)水産総合研究センターと統合し、現在のさけますセンターとなりました。

さけますセンターが実施している主な業務は次のとおりです。

- ふ化放流: サケ、カラフトマス、サクラマス、ベニザケの個体群を維持するため、遺伝的な固有性や多様性を保つためのふ化放流、資源状況の把握や研究開発のための耳石

温度標識法による大量標識放流を行っています。その放流数は年合計でおよそ1億4千万尾になります。

- 生物モニタリング調査: さけます類の資源管理や研究開発の基礎データとするため、ふ化放流データの収集、沿岸域での稚魚分布調査、回帰親魚の年齢組成や遺伝的特性の調査などのモニタリングを行っています。
- 研究開発: 生態系の調和を図りながら、資源の合理的な管理や増殖技術の向上を図るため、さけます類の資源評価と資源変動、生息環境と成長変動、遺伝的特性とその保全、効果的な増殖技術及びさけます資源の経済的管理などに関する研究開発を行っています。
- 技術普及: さけます増殖事業が効率的に推進されるため、研究開発等から得られた成果や知見を民間増殖団体や関係機関等へ広く普及しています。

北海道のさけますに携わる一機関である私たちさけますセンターは、北海道サケネットワーク会員の皆様のご意見等を参考としながら業務を行い、質問・要望等にもできるだけ応えていきたいと思っております。これからお付き合いの程、宜しく願いいたします。

札幌市豊平川さけ科学館

主任 岡本 康寿

さけ科学館では現在、水産総合研究センターさけますセンターと共同で、豊平川のサケの標識放流調査を実施しています。その経緯と内容を紹介することで、自己紹介にかえさせていただきます。

現在、豊平川には毎年2000尾前後のサケが遡上し、そのほとんどが川で自然産卵しています。一方、カムバックサーモン運動で再開されたサケ稚魚の放流は、現在も当館が継続して行っています。

ふ化放流のための親ザケは、以前は豊平川で捕獲し、足りない分だけを千歳川のインディアン水車から運んでいました。豊平川にはウライや水車などの捕獲施設はないのですが、床止(とこどめ)という堰堤の下にたまったサケを投網で捕獲することができました。

しかし、豊平川の床止に魚道が設置されるようになると、それはもちろんサケにとってはよいことなのですが、産卵前のサケを捕まえるのが難しくなりました。そのため現在では、放流のための親ザケは、ほとんど全部を千歳川産に頼っています。

千歳川のサケを親にもつ稚魚を豊平川に放すことは、はたしてよいことなのだろうか？自然産卵の継続によって豊平川の環境に適応しよ

うとしているサケの邪魔をすることになりはしないだろうか？それとも、豊平川でより多くのサケの姿が見られればそれでよいのだろうか？

そんな疑問が出発点となっているのですが、まず確かめなければならないことがあります。それは、豊平川に遡上するサケには2種類いるということです。すなわち、さけ科学館でふ化放流したもの、そして豊平川で自然産卵したものです。その比率を確認するために標識放流調査を始めました。

まず2004～2007年の春に、さけ科学館で育成したすべてのサケ稚魚のあぶらびれを切除してから豊平川に放流します。あぶらびれは一度切ると再生せず、なくてもサケにとっては大きな問題とならないので、これが標識となります。

次に2006～2011年の秋に、帰ってきた親ザケの調査を実施します。生きているサケを捕まえるのは大変なので、産卵を終えて死んだサケを拾い、性別・体長・年齢などと共にあぶらびれの有無を確認します。

まだ親ザケの調査は始まったばかりですが、2006年の結果は、確認された満2歳のサケ34尾中、11尾が標識魚(放流個体)でした。

結果が出そう2011年以降、豊平川のサケをどうしていくのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター上田研究室

研究紹介

冷水性淡水起源のサケは、春に餌の少ない生まれた川(母川)から豊富な餌を求めて冷たい北の海に下って数千キロにもわたる大回遊を行い、数年後の秋の産卵期に繁殖のため80%以上の精度で母川を識別して回帰します。サケがどのように母川を記憶して回帰するかに関する魚類生理学研究、およびサケが生息する水圏環境とサケ資源に関する環境生物学的研究などを最新の解析手法を用いて多角的に研究しています。そして、サケをモデルとして、人間が自然と共生していく共生システム(人間環境共生系)の創造を目指す新しい学問であるフィールドバイオサイエンスの構築を目指しています。

- 1) サケの母川回帰機構: サケ稚幼魚が降河回遊時にどのように母川を記銘し、親魚が産卵のためどのように母川を識別して回帰するかを、アラスカ湾まで回遊するシロザケおよび湖のみを回遊するヒメマスとサクラマスモデルとして、魚類生理学的に研究しています。
- 2) 水圏環境とサケ資源: 洞爺湖における湖水環境変化とヒメマス資源変動、標津川における蛇行復元に伴うサケ科魚類(シロザケ・カラフトマス・サクラマス)稚幼魚の降下行動および親魚の遡上行動変化、天塩川

における流域環境変動がサケ資源に与える影響、台湾におけるサラマオマスの生息環境、を環境生物学的に研究しています。

- 3) フィールドバイオサイエンス: 地球規模における環境変動および生物種の様々な問題が、人類の生存を脅かしています。サケの母川回帰には、河川・沿岸・海洋環境の保全が必須であり、体重1gで母川を降下したシロザケ稚魚は数年後に3~4kgの親魚となり母川に回帰する重要な食料資源であり、サケは河川から海洋へ流出した栄養塩を河川に還元してくれる数少ない物質循環の担い手です。地球環境と生物資源問題の解決に貢献するため、サケをモデルとしてフィールドバイオサイエンスの構築を目指しています。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
共生生態系保全領域 水圏生物資源環境分野
大学院環境科学院 環境起学専攻
教授 上田 宏

〒060-0809 札幌市北区北9条西9丁目

Tel & Fax: 011-706-2598

E-mail: hueda@fsc.hokudai.ac.jp

研究室:

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/room/ueda/>

札幌市環境局みどりの推進部

みどりの管理担当部長 下屋敷義政

「豊平川にサケを呼び戻そう」ということで、カムバックサーモン運動が始まりまして4半世紀以上がたちましたが、このカムバックサーモンの感動をいつまでも絶やさないようにと設けたのが、豊平川さけ科学館でした。昭和 59 年(1984年)10月6日に開館し、豊平川に放流するサケの孵化施設として、また市民がサケを通して自然の大切さを学習する場として、市民の強い要望が実現したものです。

以来 22 年間、放流したサケの稚魚は約 500 万尾、豊平川を遡上したサケは約 4 万尾と推計されています。

しかし、都市の成長と環境の保全を両立させることは簡単なことではありません。今後も「豊平川にサケが遡上することの意義」を確認して、札幌の自然を次の世代にどのようにして引き継いでいくべきかを市民の皆様と一緒に考えていく契機となるよう、皆さまのお知恵を拝借しながら、私どもでは指定管理者とともにさけ科学館の管理を行っていきたいと思います。

今では、豊平川にサケが上らない時代があったことを、誰もが忘れてしまったほどに、豊平

川にサケが遡上することは当たり前となりました。

これはカムバックサーモン運動に携わった多くの諸先輩、関係機関等の並々ならぬ努力と札幌市民のサケをもう一度見たいという情熱の結晶であることを忘れてはならないと思います。

昭和53年に初めてサケを放流して、昭和 56 年(1981年)に第 1 号が遡上したときの感動はそれは大変なものでした。私もそのときは今でも鮮明に覚えております。

札幌という大都市の中心を流れる河川に一度は絶えたサケが遡上し続ける、このことは、札幌市民が率先して環境の回復に努力し、大切に保全してきた証であり、世界に誇れる札幌の財産であります。

私には、毎年秋に戻ってくるサケが、豊平川の環境は大丈夫だよ、札幌の自然環境は豊かだよと教えてくれているような気がします。札幌の市民が河川を大切にし、川を取り巻く環境の重要性を理解しているからだと思います。

大雪と石狩の自然を守る会プロフィール

1. どんな会ですか

●会の概要

名称:大雪と石狩の自然を守る会(だいせつ
といしかりのしぜんをまもるかい)

Nature Conservation Society of Mt.
Daisetsu and the Ishikari

事務所:〒070-0822 旭川市旭岡 1 丁目

事務所電話 0166(51)9972

至急連絡先 0166(65)1940

代表:寺島一男

〒078-8302 旭川市緑が丘 2 条 1 丁目

1-23 Tel/Fax 0166(65)1940

E-Mail tera2112@potato.hokkai.net

会員数:285名

設立:1972年12月8日

●会の趣旨

大雪山・石狩川を中心にした自然保護活動(保全・復元、調査研究、教育、普及・啓発、提言など)をしています。大雪山憲章・石狩川憲章をつくり、大雪山を世界遺産に！石狩川を野生のサケのふるさとに！を合い言葉に様々な活動をしています。また、北海道で環境保全やまちづくりに取り組んでいる団体との連携やアイヌの人々との交流も図っています。

●大雪山憲章・石狩川憲章

「大雪山憲章」

わたしたちは

未来に生きる子どもたちとともに

ヌタプカムシペの尊厳と

父なる大雪のめぐみをとりにもどすために

力を合わせます

1 コマクサやキバナシャクナゲが咲き乱れ

自然と人間がとけ合える大雪山を！

1 エゾマツやトドマツが黒々と生い茂り

野生動物の世界が損なわれない大雪山を！

1 ゆたかな水、澄み切った空気など
生きとし生けるものの生命の基盤を生みだす大雪山を！

1 山崩れや洪水を防ぎ、いつの世にも
使えるゆたかな森林につつまれた大雪山を

1 ゆき過ぎた観光や乱開発などによる
自然破壊とは縁のない大雪山を！

「石狩川憲章」

わたしたちは

未来に生きる子どもたちとともに

母なる石狩のめぐみをとりにもどすために

力をあわせます

1 水銀などの汚染のないイネを育てる石狩川を！

1 つった魚を安心して食べられる石狩川を！

1 緑につつまれ、瀬や淵がありアキアジがのぼれる石狩川を！

1 子どもたちが水とたわむれ、川辺に市民がいこえる石狩川を！

1 下流の人びとにきれいな石狩川を！

2. これまでの歩みは

●発足の経緯

かつてアイヌの人たちは大雪山を“ヌタプカムシペ”、その山上の世界を“カムイミンタラ”と呼んで敬ってきました。北海道の中央にあって2000メートルを超える高峰のほとんどを有し、“母なる川”石狩川や十勝川を抱える“生命のシンボル”として存在しています。

原始境だった大雪山も、近年の様々な開発により自然破壊が進み、急速にその原始性が失われています。その開発の頂点ともいえるべき大雪山縦貫道路計画が、まさに着工されようと

していた1972年、これを心配した有志が旭川大雪の自然を守る会を設立しました。

会の活動は一時会員1600名を数えるほどに盛り上がり、縦貫道路建設阻止の運動に大きな役割を果たしました。その後、自然保護運動は生きとし生けるものの生存基盤を守る運動との理念のもとに、活動分野は大きく広がり、山・森・川を含む様々な開発問題や自然保護教育などに取り組むようになりました。

1975年石狩川水銀汚染問題が起きて、公害問題に取り組む石狩川水銀なくす市民の会を結成しました。汚染源の究明が一段落した1980年、この会と組織統一し現在の会となりました。

●主な歩み

1972.12 「旭川大雪の自然を守る会」発足
1973.02 ニュース「大雪の自然を守る」第1号発行
1973.03 第1回「大雪の自然を知る夕べ」開催
1974.09 第1回「森の学校」開催
1975.12 「石狩川水銀をなくす市民の会」設立
1975.08 第1回「ちびっこ探検学校」開催
1975.12 石狩川憲章制定
1976.03 第1回「守る会のひろば」開催
1977.07 第1次ヨーロッパ「緑の市民探検隊」派遣
1980.06 名称を「大雪と石狩の自然を守る会」に改称
1980.09 ニュース「ヌタブカムシペ」に改称(第50号)
1981.04 大雪山憲章制定
1981.06 第1回「ひぐま大学」開講
1981.12 ひぐま大学紀要「カムイミンタラ」第1号発行
1981.12 第1回「グリーンフォーラム旭川」(GFA)開園
1983.11 第1回「鮭ゼミナール」開催
1984.03 第1回石狩川サケ稚魚放流
1990.04 GFA 会誌「イラエカッチ」第1号発

行

1991.09 大雪山てっぺんコンサート開催
1995.05 第1回市民例会「ちゃらんけ」開催
1997.04 第1回「大雪山を世界遺産にフォーラム」開催
2001.09 北海道社会貢献賞(自然保護功労)受賞
2003.01 創立30周年記念式典実施
2006.04 自然環境功労者環境大臣表彰受賞

●取り組んできた問題

1)大雪山縦貫道路問題の取り組み(1971年)
...1973年計画白紙撤回
2)表大雪循環道路問題の取り組み(1972年)
...1974年計画白紙撤回
3)大雪山国立公園内林道問題の取り組み(1973年)...1975年工事中止
4)大規模林業圏開発問題の取り組み(1974年)...5年間着工延期、計画一部変更工事中
5)石狩川水銀汚染問題の取り組み(1975年)
...1976年汚染源解明
6)日高横断道路問題の取り組み(1979年)
...2003年8月工事中止
7)石狩川サケ回復運動の取り組み(1984年)
...継続中
8)知床国有林伐採問題の取り組み(1986年)
...1987年伐採中止
9)旭岳山麓・野花南スキー場問題の取り組み(1987年)...1988年計画中止
9)美瑛富士スキー場問題の取り組み(1990年)...計画凍結
10)士幌高原道路問題の取り組み(1996年)
...2001年工事中止
11)石狩川・野生のサケ復活運動の取り組み(2001年)...継続中
12)大雪山ナキウサギ裁判原告団に参加(1999年)...2001年勝訴
13)美瑛川河畔林伐採問題の取り組み(2001年)...計画変更

- 14)大雪山世界遺産登録運動の取り組み
(2001年)...継続中
- 15)石狩川上流緑の回廊・フットパスづくりの取
り組み(2003年)...継続中
- 16)大雪山・セイヨウオオマルハナバチ防除活
動の取り組み(2005)...継続中

3. どんな活動をしているの

● 主な行事と活動

1) 大雪山講座「ひぐま大学」

大雪山の自然観察講座(2年制・無雪期中心)です。高校生以上ならどなたでも参加できます。毎年4月に募集。大雪山に登るヌプリコースと山麓をハイキングするニタイコースがあります。事前学習会を兼ねた室内セミナーや修学旅行(1泊2日)があります。

・自然学園「グリーンフォーラム旭川」

子どもを対象に、近郊の森や川をフィールドにした野外学校です。中・高・大学生(リーダー)や親(スタッフ)も参加できます。自然の中であそびを中心に体験を重視したプログラムを展開します。通年制で毎月1回の野外教室のほか特別企画があります。毎年4月に募集。

2) さけゼミナール

石狩川にサケを呼び戻し、母なる川の恵みを回復する活動です。サケの飼育(家庭や学校など)法やサケに関する学習をします。アイヌの人たちといっしょにサケを送り、迎えるカムイチップ・ノミを実施しています。野生のサケを復活させる活動もしています。

3) 市民例会「ちゃらんけ」

自然・環境に関する市民対象の講演会・討論会・学習会などを開催しています。チャランケはアイヌ語で談判とか話し合いを意味することばですが、市民同士とことん議論を尽くして話し合ひましょうと年1~2回開催しています。

4) 大雪山フォーラム

大雪山に関する自然保護や環境問題を中心にした、市民対象のフォーラムです。“大雪山を世界遺産に!”をテーマに、年1~2回開催し

ています。

5) 植樹活動

近郊の山や川に緑を回復させるため、植樹活動を行っています。永山新川(洪水対策として人工的につくられた川)の河畔林をつくるため、生態学的混播法による植樹活動を継続的にを行っています。

6) 現地調査・提言・要請活動

開発現場の現地調査・自然保護に関連する動植物調査・大雪山国立公園の健康診断運動や交通量調査などを実施しています。また、これらの調査結果を基に、行政をはじめとする対象機関に対して提言・要請・話し合い等を実施しています。

7) 会誌・会報の発行

会報「ヌタプカムシペ」(季刊)と会誌「カムイミントラ」(年1回)を発行しています。会報は会の活動・自然保護の動き・自然情報・会員の声などを中心にニュース性の高いものを載せています。会誌はひぐま大学の紀要や特集記事・論文・資料などを掲載しています。

● 最近の活動

1) 大雪山のお花畑にセイヨウオオマルは似合わない!

世界に誇る大雪山国立公園のお花畑で、2006年8月外来種セイヨウオオマルハナバチの侵入が確認されました。発見されたのは生まれて間もない新女王で、高山帯で繁殖サイクルが成立していることを物語っています。

大昔から花との共生関係を結んできた在来種マルハナバチの生息環境を守るとともに、セイヨウオオマルの定着を阻止するため、東京大学保全生態学研究室・大雪山マルハナバチモニタリング研究会・大雪山マルハナバチ市民ネットワークなどと連携をとりながら防除・調査活動を進めています。

2006年9月1日、セイヨウオオマルハナバチは外来生物法に基づく特定外来生物に指定されました。市民・専門家・関係行政機関・養育

農家・マスコミなど広範囲な皆さんと連携をとりながら運動を進めたいと思います。

2)石狩川を野生のサケのふるさとに！

2000年の秋、36年ぶりに旭川へサケが帰ってきました。遡上の最大の障壁だった深川市にある花園頭首工に魚道が付いたことと、市民と共に1984年から放流活動を続けてきた成果です。

サケは私たちにとってとても大事な食糧資源ですが、同時に川を通じて様々な生き物たちと結びつき、流域に多様で豊かな生態系をつくる重要な役割を果たしています。また、海に集まった栄養塩類を山の森に返すなど、地球の物質循環の大切な一翼を担っています。

サケのこの本来のはたらきを大事にしようと、2005年から野生のサケを復活させる活動を開始しました。野生のサケの復活は、自然豊かな石狩川の復活にもつながります。かつてのように、大雪山を目指して悠々と遡るサケの大群を、ぜひ実現させましょう。

3)大雪山を世界遺産に！

大雪山国立公園は、幾重にも法の網がかけられ国内では最も規制の厳しいところといわれています。しかし、現実には様々な開発行為や心ない利用がじわじわと進んで、優れた自然が蚕食されています。自然を保全する理念や保全するしくみがしっかりしていないからです。大雪山に関する科学的な知見や議論も不足しています。

世界遺産条約は、地球上のすぐれた自然や文化を人類の宝(遺産)として後世に残そうという国際条約です。日本の自然保護に関する法や考え方に欠如している、たくさんのすぐれた理念と枠組みを持っています。もちろんいいことづくめではありません。しかし、大雪山の将来を考えるなら、大いに生かすべき条約です。

大雪山を世界遺産にして、広大な原生林と高山帯、そこに生きる多様な生き物たちをまるごと残しましょう。

北海道サーモン協会

北海道サーモン協会の発足は2005年4月ですが、その理念と活動は、1978年に「さっぽろサケの会」によって始まった市民運動「カムバックサーモン運動」にさかのぼります。この運動の背景は、『サケを象徴として豊かな環境を守る』ことにありました。

この運動はやがて「北海道サケ友の会」に引き継がれ発展しましたが、27年を経過した2005年、社会情勢の変化から活動の見直しに迫られ解散しました。

この普遍的な理念と活動の継続を目指して設立した北海道サーモン協会は、『サケは道民の誇るべき資産』との視点をあらためて認識し、環境問題にとどまらず、サケに関わる生活文化、子ども達の卓越した教材、国際交流などを発展させ、『子ども達に豊かなふるさとを残し伝えよう』と考えています。

【'07の主な事業】

- 3月 ・国際交流〈小学生12名カナダ、サケ学習派遣〉
- 4月 ・サケ稚魚放流式〈豊平川支流〉
・会員交流〈降下稚魚観察と河畔清掃〉
- 7月 ・夏休みサケ学習〈市場見学と食育〉
- 9月 ・公開市民講座〈第3回：秋サケを見直そう〉

- ・塩蔵イクラ製造講習会
- 10月 ・会員交流〈産卵床観察と河畔清掃〉
・国際交流〈カナダ小学生12名、サケ学習受け入れ〉
・サーモンロードふれあいツアー〈サケ環境の観察検証〉
- 11月 ・北海道サケ会議〈北海道サケネットワーク総会と連動〉
- 12月 ・会員交流懇談会
- 3月 ・春休みサケ学習

その他 会報『Salmon』〈年2回発行〉

【代表・連絡先】

代 表 木村義一
連絡先 事務局長 高橋寿一
〒006-0839
札幌市手稲区曙9条1丁目
10-25
Tel: 090-1523-3278

(財) 日本釣振興北海道地区支部

副支部長 山道正克

(財) 日本釣振興会は、東京に本部を置く全国組織で、1970年(昭和45年)に設立されました。目的は、魚族資源の保護培養、釣り場環境の整備保全、釣りに関する知識の普及、啓蒙等に必要の事業を行い、レクリエーションとしての釣りの健全な振興を図り、明るい豊かな社会形成に寄与することです。北海道地区支部の設立は1979年(昭和54年)で、再来年には30周年を迎えます。全道各地に15箇所の副支部を置き、ヤマベやクロソイなどの稚魚の放流、釣り教室や釣り大会の開催を通じてのルールやマナーの啓発を促進するとともに、海辺や湖岸、川岸などでの清掃活動等に取り組んでいます。

釣りには、単にレジャーというだけでなく、さまざまな文化的側面があります。江戸和竿に代表される竹竿などは伝統工芸として知られています。釣った魚の記録だけでなく鑑賞のための芸術魚拓の愛好者もいます。竿を使ってオモリをいかに遠くへ飛ばすかという純粋なスポーツとしてのキャスティング競技も盛んになってきています。こうした幅の広さ、奥行きが釣りの魅力であり、豊かな人間形成にも役立っているなど、釣りは、古来から受け継がれてき

た社会の『文化』であると考えています。

魚を巡って、とかく漁業と釣りは対局して対峙するよう見られがちですが、その時代はもう過ぎたと思います。限られている資源をそれぞれに利用する立場から、まず、資源の保護について力を合わせて取り組むことが急務と考えています。とりわけサケは、単に食料資源というだけでなく、文化的にも教育的にも観光においても最も多様な価値を持った魚であり、天が授けた北海道の財産と言えましょう。そのことは、今回のネットワークに参加されている諸団体などの多様な活動からも伺えるところで

今回、「サケ」を共通語として、今までには共通の立場で集まることがなかった各界がネットワークを形成したことは意義深いことと考えます。お互いにサケの多様な利用形態を知り、それぞれの考えを理解し、サケの保護と利用について共通の視点が醸成されるなら素晴らしいことと思います。そのような中で、釣りについても社会の共通問題として話し合うことができればと期待しています。

安平町マチおこし研究所

平成元年(1989年)2月14日、国内最後のSL基地、追分機関区も国鉄の民営化(1987年 昭和62年)合理化により廃止されました。追い打ちを掛けるように米作の減反等により、若者が「おいわけ」を去っていきました。

“マチづくりは人づくり”を基本に43名が夢を語ろうと設立しました。

平成 元年～ 4年 まちづくりの提言団体
4年～ 8年 安平川フォーラム を中心にしたまちづくり
8年～10年 小中学生へ安平川についてアンケート調査
きれいな遊べる川・魚釣りの出来る川 (90%)
源流探査・河口までの49.8 km の河川調査
10年～15年 生活雑排水の落ち口へ木炭投入(水質浄化)

ニジマスの放流(アブラビレ切除・タグ付け放流)
15年～ サクラマスの受精卵放流(埋没放流)
16年～18年 サクラマスの受精卵放流(埋没放流・ふ化盆放流)
土現へ魚道設置の提案書を提出
魚道調査・水棲生物調査

現在は道立孵化場の河村副場長の指導のもとで、サクラマスが回帰できる川づくり運動を展開しています。

安平町マチおこし研究所
事務局長 工藤隆男
Tel: 090-6696-9763

行事予定表

年・月	会議・講演会・講習会	フィールドワーク
2007 4		稚魚放流式、真駒内川周辺 会員交流・降下稚魚観察（サーモン協会） 造成産卵床モニタリング （大雪・石狩_守る会）
5	北海道サーモン協会総会	造成産卵床モニタリング 同上用稚魚放流（大雪・石狩_守る会）
6		石狩川魚道調査（大雪・石狩_守る会）
7		7/1 クリーン安平川の日（安平町マチ研） サケ学習・夏休み教室（サーモン協会）
8	塩蔵イクラ製造講習会（サーモン協会） 第3回公開市民講座（Ⅱ）	旭川市内・近郊の石狩川水系湧水調査 （大雪・石狩_守る会）
9		第20回サケを迎える集い、石狩・秋月橋 石狩川魚道調査（大雪・石狩_守る会）
10	総合講座「サケ学入門」開講（北大教養） 10/28 国際交流・カナダから来日 （サーモン協会）	河川清掃と産卵床観察会（サーモン協会） サーモンロードふれあいツアー（Ⅱ） 漁川のサケ産卵床調査（道立水産孵化 場・えにわ市民サケの会） 産卵床造成、栄園橋（大雪・石狩_守る会）
11	北海道サケ会議（サーモン協会） 北海道サケネットワーク総会 さけゼミナール（大雪・石狩_守る会）	
12	サーモン協会・会員交流懇談会 さけゼミナール（大雪・石狩_守る会） サケ卵稚魚の飼育ガイダンス（道立水産 孵化場・えにわ市民サケの会）	教育用サケ卵配布（道立水産孵化場） 受精卵配布；受精卵、造成産卵床に埋設 （大雪・石狩_守る会）
2008 1	市民サケ学習講演会「ちゃらんけ」 さけゼミナール（大雪・石狩_守る会）	
2		
3	さけゼミナール（大雪・石狩_守る会）	サケ学習・春休み教室（サーモン協会）

北海道サケネットワーク会員

北海道立水産孵化場	水産総合研究センターさけますセンター	千歳サケのふるさと館	
標津サーモン科学館	札幌市豊平川さけ科学館	北海道大学理学研究院	
北海道大学北方生物圏 FSC	札幌市立東白石小学校	札幌市環境局みどりの推進部	
北海道水産林務部漁業管理課	えにわ市民サケの会	大雪と石狩の自然を守る会	
川の駅十勝川運営委員会（おびひろサケの会）	北海道サーモン協会	北海道定置漁業協会	
丸水札幌中央水産（株）	高橋水産（株）	佐藤水産（株）	日本釣振興会北海道支部
石狩川下覧権	網走漁業協同組合	長万部漁業協同組合	盃漁業協同組合
（財）十勝エコロジーパーク財団	十勝川自然再生協議会準備会サケ分科会		
標津漁業協同組合	泊村漁業協同組合	安平町マチおこし研究会	

北海道サケネットワーク役員

代 表	浦野 明央	北海道大学・教授
副 代 表	太田 昇	おびひろサケの会・会長
事務局長	木村 義一	北海道サーモン協会・代表
幹 事	寺島 一夫	大雪と石狩の自然を守る会・代表
幹 事	市村 政樹	標津サーモン科学館・学芸員
幹 事	山道 正克	日本釣振興会北海道地区支部・副支部長
監 査	《未就任》	恵庭市民サケの会・会長
監 査	石黒 武彦	水産総合研究センターさけますセンター・技術開発室長

編集後記

創意と工夫の良し悪しがもろに見えてしまう雑誌の、それも創刊号の編集とあって、研究費の報告書作成などとは比べ物にならないほどあれこれと試行錯誤しましたが、これ以上時間をかけている訳にもいかず、本冊子のような会報をお送りする次第になりました。これから会報を情報交換の重要な場としていくために、ML の利用も含め情報提供をお願いします。（編集子）

サケネットワーク会報 No. 1

発行日 2007年4月20日

編集・発行 浦野明央 (aurano@sci.hokudai.ac.jp)

事務局 北海道サーモン協会 木村義一

〒004-0022 札幌市厚別区厚別南

7丁目18-19

Tel/Fax: 011-894-0081

e-Mail: giichiketa@yahoo.co.jp

URL: <http://www.k2.dion.ne.jp/~aurano/>
